

就職活動準備期の学生に対する授業実践

—ワークショップを通して—

The teaching practice for students preparing for job hunting

—Through the workshop—

和田 秀夫 Hideo Wada

(こどもの生活専攻)

抄 録

若者の社会的自立の困難さが指摘されるようになって久しい。「学校から職場への移行」がスムーズにいかず、職場に定着できない若者の問題もそのひとつである。本稿はこの移行の問題への支援として提起された「アクティブトランジション」の概念に基づくワークショップによる授業実践の概要である。

この実践は、仕事世界への入り口である就職活動の不確実性と類似点の多い「就活ヒッチハイク」のワークショップを通して、就活とその先にある仕事に対する気づきを得ることを目的としている。この活動のプロセスの中で、学生がさまざまな視点から目的とする気づきを得たことが明らかになった。その結果から、不安の多い就職活動準備期に、他者とつながりながら能動的に就活へのアクションを起こすきっかけとなる機会を学生に提供することの重要性を論じている。

キーワード

就職活動、ワークショップ、学校から職場への移行

目 次

- 1 はじめに
- 2 ワークショップ実践のねらい
- 3 「就活ヒッチハイク」取り組みの実際
- 4 おわりに

1 はじめに

社会の中で自立し、活躍していくためには、自分に適した職場を選択し、経済的な基盤を築きつつ、仕事を通じて社会とつながっていく必要がある。

しかし近年、若者の社会的自立をめぐる問題がさまざまに語られ、若者が定職につかないことや、職を得てもわずかな期間で辞めてしまう早期離職の問題等が指摘されている。

平成30年度版「子供・若者白書」では、現在、「学生」の88.4%が「正規雇用」を希望すると回答している、ということが報告されている。多くの学生が卒業後の働き方や生き方を視野に入れて学生生活を送っており、安定した就労を目指していると考えられる。

それにもかかわらず学校から職場への移行がスム

ーズにいかず立ち往生してしまう学生は多い。経済産業省の社会人基礎力に関する研究会「中間取りまとめ」（2006）においては、次のように述べられている。

「働くこと」は人々の人生において大きな地位を占めており、社会に出るとき、多くの若者は職場や地域社会で思うような活躍をし、豊かで充実をした人生を送りたいと願っている。その実現のためには、「職場や地域社会で求められる能力」を適切に身につけることが必要となるが、90年代以降に発生した環境の変化の下で「若者が社会に出るまでに身に付ける能力」と「職場等で求められる能力」とが十分にマッチしていないことが指摘されている。こうした問題は近年の「若者が学校卒業後にスムーズに職場に定

着できない」という問題（いわゆる「学校から職場への移行」の問題）の背景にもなっていると考えられる。¹⁾

このような状況に対し、経済産業省は職場で求められる主要な能力を社会人基礎力として、「前に踏み出す力（アクション）」「考え抜く力（シンキング）」「チームで働く力（チームワーク）」の3つの力を明確化し、さらにそれぞれについての能力要素を挙げている。そして、その育成を通じて円滑な移行と若者の社会的自立をめざしている。また、文部科学省によるキャリア教育の視点からもこの問題が指摘され、必要な能力の育成を通じた支援について言及されている。このように、学校から職場への移行（トランジション）の問題については、さまざまな取り組みが提唱されてきた。

教育の場から仕事の場へのスムーズな移行を目指して研究者が提起した「アクティブトランジション」という概念に基づいた取り組みもその一つである。

本研究はこの取り組みの一部であるワークショップによる「就職活動準備期（3年後期）の学生への授業実践」について検討することを目的としている。

2 ワークショップ実践のねらい

2.1 アクティブトランジションの概念

「アクティブトランジション」は次のように定義され、今回参考にした書籍のタイトルにもなっている。（館野 中原 2016）

アクティブトランジションとは

1) 「教育機関を終え、仕事をしはじめようとしている人々が、働きはじめる前に、仕事や組織のリアルをアクティブに体感し、働くことの準備をなすこと」

その結果として

2) 教育機関から仕事領域への円滑な移行（トランジション）を果たすことをいいます。²⁾

また、ここでは、現在の就職支援が、主に「就活での成功」すなわち「内定の獲得」などに重点が置かれていることにふれ、

今後の大学や教育機関は、卒業生を社会に送り出す前に、それぞれの校種・状況に合ったかたちで「アクティブトランジション」の支援をなすことが求められるのではないかと、というのが私たちの着想点です。³⁾

と述べている。

では、トランジションについて、具体的にどのよ

うな支援をしていけばいいのだろうか。

「アクティブトランジション」の書籍では、研究知見に基づき大学で実践できるように開発された、3つのステージにおけるワークショップ（「就活ヒッチハイク」「カードdeトーク」「ネガポジダイアログ」）が紹介されている。今回、この中の就活準備編である「就活ヒッチハイク」に着目し、本学の授業として実践した。

2.2 「就活ヒッチハイク」の内容と目的

「就活ヒッチハイク・ワークショップ」とは、就活をヒッチハイクになぞらえた、大学のキャンパス内でのグループ活動である。いわゆる車をヒッチするヒッチハイクではなく、「歩いている人」をヒッチする。キャンパス内で目的地を書いたサインボードを掲げ歩く人に声をかけ、目的地まで一緒に行ったり、途中で別れたりしながら、制限時間内にゴールを目指す。

このワークショップは、2016年、2017年、愛知学泉大学家政学部こどもの生活専攻の学生を対象に、3年生後期の専門演習の授業の中で実施した。この時期は本格的な就職活動を控え、学生の不安が高まってくる時期である。

「就職活動は、プロセスが曖昧である、選択肢が無数にあり何を選択すべきかわからない、自分の選択の善し悪しがわかりづらい、自分でコントロールしづらいなど、多くの不確実性を伴う活動です。」⁴⁾とあるように、本専攻の学生達の進路選択も多種多様である。子どもに関わる仕事、一般企業など、たくさん選択肢があり、学生はまずそこで迷う。また、就活の進行状況によって新たに選択肢が出現することも珍しくない。このような不確実性は就職活動を前にした学生の不安の大きな要因であろう。

「就職活動の本番前に、不確実性の高い就職活動と類似した活動を実際に体験し、その体験から就職活動に生かすことができるヒントを学べるように」⁵⁾デザインされたのがこの「就活ヒッチハイク」である。就職活動をヒッチハイクに見立てたこのワークを体験・体感することで、さまざまな気づきを得ることを目的としている。就職活動前や就職活動期に陥りがちな心理状態と似た状況の中で行動を起こしていくこの体験は、就職活動を前にした学生の不安の軽減にも有効なのではないかと考え、授業としての実践を試みることにした。

このワークショップの実践にあたっては、元の形

から本学の規模・状況に合った形に編成し直し、また、本学で取り組んでいる「社会人基礎力」の育成も視野に入れて実施した。

本稿は 2017 年度の授業内容に基づいた実践報告であるが、2016 年の実践内容も参考にしている。

3 「就活ヒッチハイク」取り組みの実際

3.1 第1段階（活動内容を知る）

1) 就活の現状の自己評価と学生同士の交流

まず、学生に「就職活動の準備がどの程度できているか」や「社会人になることへの今の気持ち」を尋ねワークシート（図1）に記入させた後、学生同士で現状を交流させた。

その結果、自分の進路希望がはっきりしている学生の発言が多く、このような学生は、不安を感じている内容についても具体的に話せていたが、進路を決めていない学生は発言自体が少なかった。

しかし、ワークシートの記述からは圧倒的に多くの学生が就職活動の準備がまだまだ不十分だと感じており、就活に対して不安を抱いていたことがわかる。回答した学生 50 名のうち、34 名の学生が、就活準備が「まだまだである」と答えており、14 名が「少し足りない」と答えている。また、社会人になることについては、26 名が「不安」、14 名が「少し不安」と答えている。

そして、現状についての自由記述の例としては、次のように書いている（学生の言葉そのままに記載）

- ・3年生後期になり、就職に向けて行動し始めていないといけない時期ですが、大学での学びや実習等を経験していくうちに、自身の目標に迷いが生じています。周りの子は将来の目標に向けて動き始めているのに自分は何も行えていなくて不安しかありません。何をすべきなのかも分かりません。
- ・自分が本当にやりたいことがわからない。あいまいなままはいやだけど、職業が多すぎて選択できない。実習を通して、思っていたのと違ってたり、人間関係の難しさを通して、その道に進みたいと思えなくなってしまった。やらなければならない優先順位がわからなくなってきた。

このように、不安の要素として、自分の目標に迷いが生じていたり、何を選択していいのかわからな

い、何から手を付けていいのかわからない、という内容の記述が多かった。

図1 第1段階ワークシート

2) 「就活ヒッチハイク」の活動の説明

①活動のイメージを作る

まず、活動の概略を伝え、様子がイメージしやすい写真資料を利用しながら、どこをどのように移動していくのか、どんな声かけ、行動をすればよい活動なのかを説明した。（図2）



図2 授業資料活動イメージ（参考書籍より作成）

② ヒッチハイクと就活の類似点を知る

資料を基に就活ヒッチハイクの意義を両者の類似点から伝えた。(図3)

	ヒッチハイク	就職活動
運や縁という要素	どんなに待っても車が止まらないこともあるが、すぐに止まることもある	たまたま友人の誘いで参加した企業に興味を持ち、入社することになった
視野の拡大	いろいろな人に出会えて、知らない世界や生活を知ることができた	いろいろな企業や社会人との出会いで、雇業や社会に対する理解が深まった
自己成長	自覚的に到着できて、自分に自信が持てた	面接を通じて、自分自身の理解が深まった
楽しさ	見知らぬ人に出会える楽しさを体験できた	就活中だからこそのいろいろな企業を訪問できて楽しい
制御不能なことの多さ	誰が止まってくれるか自分では決められない	募集の有無、誰が面接するのかなど自分では決められない
早い	何時にも車が1台も止まらないのは早い	何十社もエントリーシートを置いて、面接に進めないのは早い
長い	いつ目的地に到着できるか、長い時間になる可能性がある	いつ内定が取れるのか、長い就活になる可能性がある
怖い	よからぬ人がドライバーである可能性がある	環境的に悪い企業かどうかの判断がつきにくい
引継ぎ	タイプに合わない人との車に乗ると乗れる	次々に知らない人と会って話をすることが乗れる

図3 授業資料 (就職活動とヒッチハイクの類似点) (参考書籍より作成)

③活動イメージを表現する

ワークシートに自分が得た活動イメージを文章で表現させ、さらに近いイメージ項目を選択させる。(この項目4のイメージ選択は、記入を忘れていないか、選択しにくいかのいずれかにより、記入していない学生も多かった。)

文章では全員記入しており、次の例のような記述がなされていた。

(学生の言葉そのままに記載)

- ・イメージしにくいというのもあるけど、楽しさという気持ちが大きい。運と縁って本当に大切だと思うし、そこで自分がどう関わり対応していくかで大きく変わってくると思うから、この活動を大切にしたい。
- ・まだ想像できていない部分の方が大きいので、たのしみでもつまらなくもないです。ですが、就職活動の不安に対して自分なりの対処法や考えを見つけていくことができたらいいなと思っています。自分なりに楽しみたいと思いました。

④授業の振り返り

ワークシートに記入させる。(内容は次節)

3) 第1段階を終えた時点の学生の感想

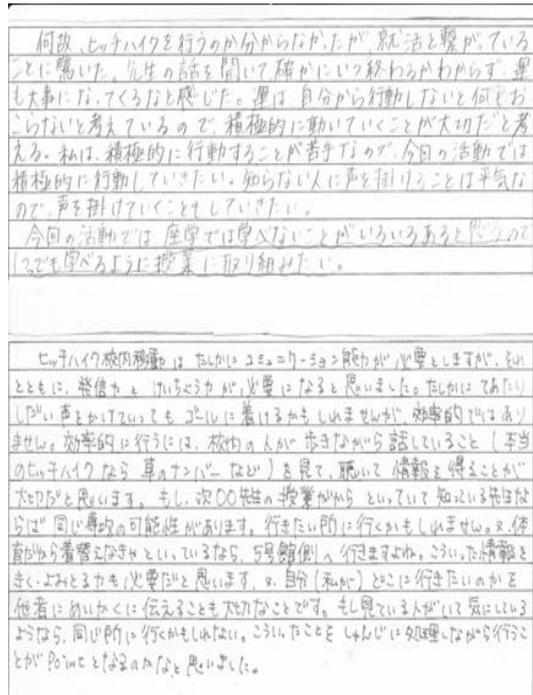


図4 学生の感想①

第1段階を終えた学生の多くが自分の就活とこの活動を結びつけ、意味のある活動にしたいという意気込みが感じられる記述をしていた。また、「チームとしての成果」や「楽しむこと」を大切にしたいという感想も多かった。

3.2 第2段階 (活動の準備)

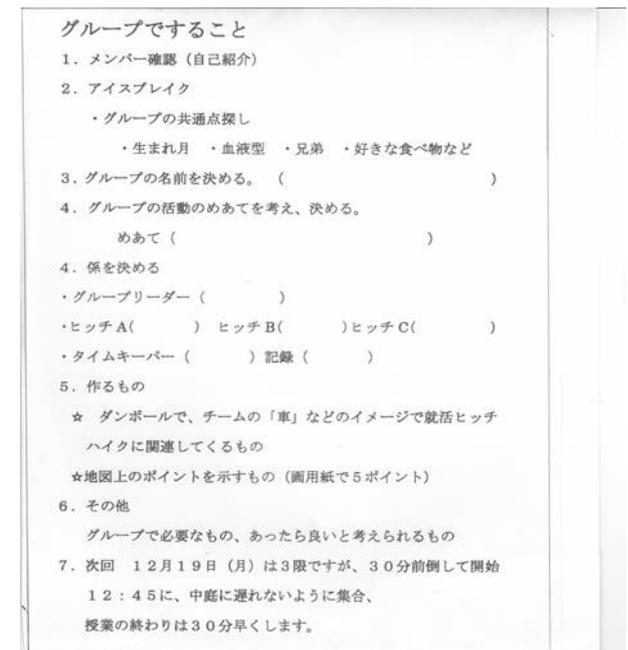


図5 授業資料 (グループですること)

- 1) グループ分けの発表
グループに分かれる。(指導者が編成したグループ)
- 2) グループでさまざまな決定 (図5)
- 3) 社会人基礎力についての確認
社会人基礎力が発揮できる場面、自分の中の力に気づける場面が多いことをあらためて伝える。
- 4) コースとルールの説明



図6 ヒッチハイクのコースと通過ポイント
(授業資料)

- 5) 製作作業 (ヒッチハイク用小道具)



写真1 グループで小物作り

グループの意識を高めるために、「グループですること」の話し合いや作業は非常に役立った印象がある。特に、製作作業においては和気あいあいと取り組む姿が多く見られ、グループ内の親近感を増し信頼感を築く時間となっていた。

学生の感想の中にも、製作作業の楽しさを伝えるコメントがいくつもあり、ヒッチハイク本番の活動力の向上につながったと考えられる。

- 6) 次回 (ヒッチハイク本番) の連絡

3.3 第3段階 (就活ヒッチハイク本番)

指導者準備 (通過ポイントにコーンを置く)

- 1) 集合、人数確認
- 2) スタート (12:45)
- 3) 就活ヒッチハイク (制限時間 20 分)

専門演習Ⅱ 担当 和田秀夫

就活ヒッチハイクのルール

チームで協力して、安全で学びある活動にしよう!

- ① 歩いている人に声をかけ、その人の目的地まで一緒に行く
(目的のポイントが合えばそこまで一緒に) 途中で別れる場合はそこから、次の人を探す。ポイントで、係を変更し、次のポイントを目指す。
- ② 自分で歩くのは NG。ただし、声をかけるために5mくらいを歩くのは OK。
- ③ 歩いている人に目的地を変更してもらうのは NG その場合は途中で別れて、そこで、新たな人を探す。(途中下車)
- ④ 友だちに声をかけるのは NG。
- ⑤ ポイントに着いたら、歩いてもらった人にお礼を言って、係(ヒッチ)の交代をする。(リーダーが確認)
- ⑥ 出発から25分たったら、途中でもゴールへ移動する。
- ⑦ 予期せぬトラブルがあった場合は、先生(和田、瀧美)へ連絡
- ⑧ 校内の移動だけなので、校外には出ない。
- ⑨ 記録は、声のかけ方や、相手の対応など、学習の振り返るポイントやメンバーの様子についても記録し、その時の気持ちなども書き残す。

図7 授業資料 (ヒッチハイクのルール)



写真2 活動の様子①



写真3 活動の様子②

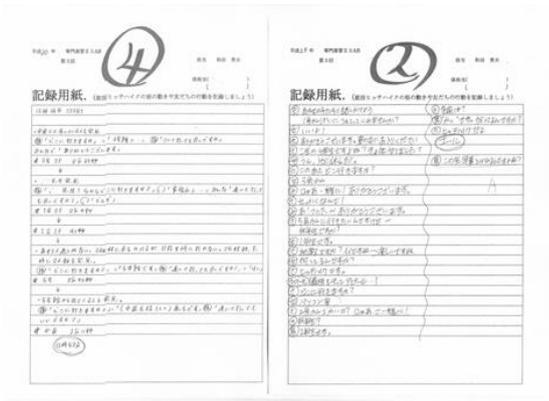


図8 活動中の記録（記録係の仕事）

4) ゴール (13:05 までに)

3.4 第4段階 (就活ヒッチハイクの振り返り)

平成29年 専門演習Ⅲ 3AB
第15回 1月9日 (火) 担当 和田 秀夫

受講者
子どもの生活専攻 () 年 学籍番号 () 氏名 ()

1. 就活ヒッチハイクを実施しました
このヒッチハイクは社会人になるための学習として各自が提案、協力して活動できましたか。

2. 始める前の気持ちを書いてください。

3. 実際にやってみて、いろいろなことがあったと思います。
あったことを書いておきましょう。(班の記録などに)

4. グループで話し合い、就活ヒッチハイクでの学びを書きましょう。

6. 今回の活動の感想を書きましょう。(就活について、自分や友だちの行動について)

図9 第4段階ワークシート

1) 各班で今日の活動について振り返る。

① 始める前の気持ちを振り返る

(学生の文章、そのまま記載)

・ 私はどちらかというわくわくしていました。不安だったといえば、人が通るかな?どの順路でいくといいかな?というくらいでした。始まる前まではどうやって声をかけよう!と声のトーンや大きさについて考えました。私は人見知りしないタイプなので、誰かがどう声をかけようか迷っていたら積極的に声をかけて、全体の気持ちを高めることができるようにしようと考えました。

・ 正直、知らない人に話しかけるということは嫌でした。でも、やるしかないという気持ちで就活ヒッチハイクに挑みたいとも思っていました。また、「何て話かけよう、、、」「お忙しい所すみませんからかな」と一人でずっと考えていました。こう始まる前の気持ちには不安という部分が大きかったです。でも、仲間と一緒に頑張ろうという気持ちもありました。

いざ出発直前になると、さまざまな不安やネガティブな感情が出てきたと振り返る学生が多かった。しかし、記入例のように、仲間の存在を意識して活動に向かおうとする学生もいた。

② 実際にやってみて学んだことを振り返る。

(学生の文章そのままに記載)

・ ヒッチハイクをやってみて、自分たちがただ待っている(立っている)だけでは何も進まないなと思いました。自分たちが声を掛けに行くことで、その場に行くかもしれないし途中までもかもしれないし、もしかしたら行かないのかもしれない・・・けれど、先には進めると思いました。

・ 周りの人の行動をよく見て、声をかける人を選んだ。グループで協力して観ることによって多角的な視点を知ることができた。

積極的に声をかけるという目標を班員全員で意識し、一つの目的意識を皆で共有することを学んだ。

このように、多くの学生がアクションを起こすこ

とによって得られた学びが多いことを記していた。

2) 各班から活動の振り返りについて発表。

各班での振り返りを基にそのまとめを全体場で発表し、就活ヒッチハイクの学びを全員で共有した。

3) 指導者 (和田) からのコメント

4) 各自、まとめの感想の記入

3.5 全ての活動を終えた学生の感想

図9のワークシートに、下記の例のように自由記述で感想を書かせた。

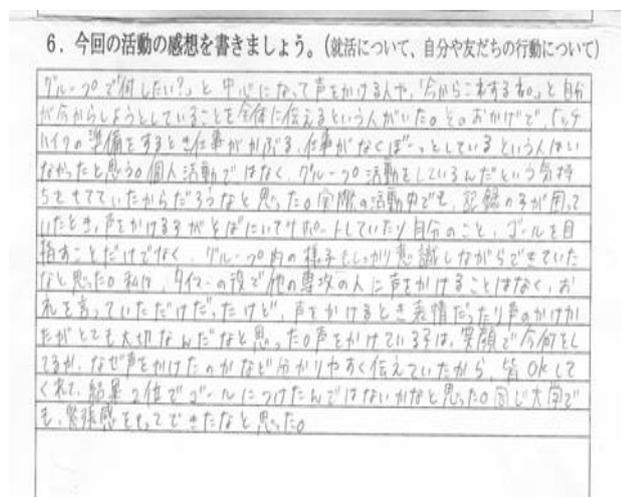


図10 全ての活動を終えた学生の感想

この感想を書いた学生は、自分のグループについてコメントし、役割分担と役割の自覚によってグループが上手く機能していたこと、メンバーが発信力を発揮していたことが活動成功の鍵であったと分析している。

このように、学生はさまざまな視点から感想を書いていて、就活のヒントやその先にある社会人としてのヒントを得ていると考えられるものが多かった。主立った視点は、以下のようなものである。その視点を項目名にして、いくつかの学生の感想を学生の記述そのままに一部抜粋して記載する。

○チームで働く力

- ・今回の活動を通して仲間と乗り切る大切さを学ぶことができました。今回の活動は仲間がいたからこそ成立したものだと思います。看板作りでも自分はそのような制作が苦手でしたが

グループの子が「やろーか。」と言って手伝ってくれたり、準備において手間をかけずに行うことができました。実際の活動でも、順調に行えてる時は、皆で盛り上がることができ、行き詰まってしまった時は「次どうしようか。」や、ちょっとした世間話を交えて、退屈を感じさせないような雰囲気作りを行うことができました。

- ・めんどくさいと思っていた活動だけど動き始めるとみんなで協力しながら行うのが楽しくなってきた、連れていってもらえると分かった時はみんな本気で喜んでいたように感じます。またみんな積極的に声をかけていてこういった能力がこれからとても大切になっていくと感じました。

○コミュニケーション力

就活と関連させて考えると、相手側に積極的にアプローチし、何故声をかけたのか、など自分についての説明や主張をもっとした方が良いと思いました。自分は筆記当番だったので、客観的に周りのやりとりをみるのができたので良かったです。特に相手が戸惑っているときに、どのように相手に安心感を与えれば良いのかを見ることができました。

○アピール力

話題を見つけることの大変さを感じました。相手から質問されたら答えられるけれど、こちらから話すことが少なかったのが難しさを感じました。そこで、相手が興味をもつような話をするのが大切なのではないかと考えました。一つの話でも、どんどん掘り下げていくことでいろいろな表情が見えてくると思います。自己PRでも話をつなげて自分を知ってほしい！と表現することが大切だと思うので、今回はいろいろなことから自分を積極的にアピールすることの大切さを学びました。

○状況把握力

子生ラウンジに着いた時、座っている人は沢山いました。しかし、座っているのも移動はしません。また、歩いている人でも行きたい方向と違うと声が掛けにくいと思います。ここで、周りを見て誰に話しかければ良いか状況を把握することが大切だと感じました。

最初、他のグループがどんどん他の場所へ移動

していく中で置いていかれる気がして不安でした。しかし、自分達のペースで進めていけば良いのだと感じました。これは就活でも一緒に周りに流されずに自分のペースでやっていけば良いのだと思いました。

○他者の支援を得る経験

話しかけた学生の中には「前もこれに話しかけられました」と趣旨をすぐに受け入れてくれる人もいて安心した。しかし「何やってるんだろう？」という目で見られスルーされることもあったけれど、「いいですよ」ところよく受け入れてくれる人もいた。その中で人のあたたかさを感じたし、明るく笑顔で話しかければ反応も返ってくるのだと感じた。

○他者の姿から自分を省みる経験

グループでの友達の姿をみて、声をかけた人と会話したりとスムーズに話しかけていました。その姿をみて、どのような人でもなにげなく声をかけ会話出来る人ってすばらしいと感じました。

私はどうしても「ありがとうございます」「助かります」という同じ声かけしかできなかったのですが、もっと話すレパートリーを考えて自然と言葉ができるよう普段の生活から言葉を考えていきたいです。

○就活イメージの体感

今回の活動を通して、就活の時に「くい込んでいく姿」を感じる事が出来ました。相手に引かれてもこちらからドンドン押しにいたり、時にはこちらも引いたりなどを行い、相手と交渉するためのかけひきを重要視していくことが、就活には、ひいては社会に出てからは必要不可欠なことなのであると感じました。

○就活に向けて踏み出す決意

今回の活動を通して、就活とヒッチハイクを結び付けて活動する面白さを知りました。(中略)
これから就活が始まるにあたって不安でいっぱいですが、友だちと色々な情報交換したり、就職課に積極的に行ったり、自分に合った幼稚園を探せるように、情報をしっかり集めていきたいと思っています。

このように、学生の感想には就活にとって「必要な

力」に着目しているものもあれば、「必要な経験」や「必要なものの見方」に言及したものもある。また、具体的な就活のテクニックや心構えに結び付けてコメントした感想もあった。得られた就職活動へのヒントは多岐に渡っている。

4 おわりに

今回のワークショップ実践においては、大学の規模の面で限界があり、出発前の学生の感想にも散見されるが、「人が少ない」という問題点があった。授業時間内には歩いている人が少なく、人に声をかける活動が成り立ちにくいため昼休みを利用し、変則的な授業時間としたが、それでも人数が多いとは言えなかった。また、外部の人が構内を歩いていることも少なく、条件的には豊かなヒッチハイクの活動になりにくい状況にあった。

しかし、このような不利な条件下であるにもかかわらず、学生達がアクティブに取り組む様子が多く見られた。チームとしての活動を楽しめてもいた。

今回の活動の中心となったそれぞれのチームは指導者側で編成したため、仲の良いメンバーで組んではない。「知ってはいるが、よくは知らない」という関係性の中で、自分をどう位置づけ、チームとしての活動をしていくかは就活や社会生活につながっていく大事な要素であろう。学生の感想の中にも、「仲間で乗り切る大切さや楽しさ」「チーム内の役割の大事さ」など、チームで働く力についてのコメントは最も多かった。

このチームワークの向上については、第2段階の「活動の準備」が重要な役割を果たし、ここで役割意識や結束力が培われたと考えられる。そのまま、本番の活動のさまざまな事態にも、チームとして適切に対処できていた。ヒッチハイク時に快く受け入れてもらえたときは共に喜び、冷淡な反応が返ってきたときは、気持ちの切り替えにおいてチームの中間の存在が支えとなっていた。

コミュニケーションの問題にも多くの学生が着目していた。とりわけ、ヒッチの相手とのコミュニケーションには課題が多かったと振り返っている。自分達の意図を正確に伝える言葉の重要性とともに、表情や声のトーン等、言葉以外の印象の大切さについても記されていた。また、協力を申し出てくれた相手との会話力も大事であるという気づきもあった。

今回の活動は「就活とヒッチハイクの類似点」か

ら「就活をイメージしてのヒッチハイク」を通して就活の特性を理解し、アクションを起こしていこうとしたものである。

この活動の第1段階で就活について問いかけたとき、就活のイメージが湧かず、何から行動していけばいいのか、考えが整理できていない学生が多かった。しかし、活動中のさまざまな場面を就活場面に置き換えて考える経験をそれぞれの学生が積むことで、一人一人、自分独自の就活イメージとそのヒントを得ることができたと考えられる。多様な活動後の感想がそのことを示している。

本専攻の学生は保育士、幼稚園教諭、小学校教諭の免許取得が希望により可能であり、子どもに関わる仕事も含め多様な進路を視野に入れることができる。しかし、選択肢の多さゆえ一歩が踏み出せないこともあるであろう。

今回の活動で、不安なままでも、気が乗らなくても、とにかくアクションを起こすことによって、物事が動き、展開し、ゴールが見えてくるという経験から、「やってみたら何とかできた。」という効力感も得られたのではないかと考える。そして、そこには、チームの仲間をはじめとして、ヒッチハイクに協力してくれた人など、他者の存在が必ずある。実際の就活においても、周りの人の支援を上手く受けながら目標に向かって行動できるよう希望する。

今回の実践は就職活動準備期間という、トランジションの中の限られた時期に行う働きかけに過ぎない。しかし、就職活動は仕事の世界へ一歩を踏み出す、その入り口である。能動的に取り組む就活は、後の社会人としての活躍にもつながっていくと考えられる。

これからも、学生がアクティブに取り組める場を提供していける授業を追求していきたい。

参考文献

- 1) 内閣府. 平成30年度版 子供・若者白書
http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h30honpen/pdf_index.html (2018年9月5日アクセス)
- 2) 文部科学省. キャリア教育とは何か
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/.../1306818_04.pdf (2018年9月5日アクセス)

(原稿受理年月日 2018年10月11日)

引用文献

- 1) 経済産業省, 社会人基礎力に関する研究会
—中間取りまとめ— (2006)
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/chukanhon.Pdf>. 2018年9月4日アクセス
- 2) 館野泰一・中原淳ほか: アクティブトランジション (三省堂) (2016) p10
- 3) 同書 p10
- 4) 同書 p40
- 5) 同書 p40